

・キーワード・  
谷崎潤一郎  
近代文学  
探偵小説



ハイフレックス講座

講座 No.109

# 谷崎潤一郎と探偵小説

## 都市のモダニティを読む

各回定員 対面：100名／オンライン：200名

受講料 正会員：各回 1,000円(税込)／ビジター：各回 2,000円(税込)

佛教大学文学部教授 日高 佳紀 (ひだか よしき)



谷崎潤一郎(1886-1965)は大正期に、のちのミステリー作家に影響を与える都市小説・犯罪小説を多く発表します。本講座ではこれら「探偵小説のさきがけ」

ともみなせる作品を読み解き、しかけられた秘密、謎、犯罪といったものが描き出す近代性(モダニティ)とは何かについて考えていきます。

全6回 | 木曜日 10:30 ~ 11:45

**10月10日(木)** **モダン都市へのまなざし／「秘密」** 第1回

日高 佳紀 (ひだか よしき)

初期作品「秘密」(1911)において女装して街を歩きまわる男の視線からは、犯罪者や探偵の心理が浮かび上がります。かくされた「秘密」をめぐる意識とモダン都市との関連を考えます。

**11月7日(木)** **フィクションの在処／「白昼鬼語」** 第2回

日高 佳紀 (ひだか よしき)

「白昼鬼語」(1918)には犯罪行為をのぞき見る者たちが描かれています。やがて彼らが巻き込まれていく出来事を通して、フィクションがいかなるところで発生するか検討します。

**12月12日(木)** **狂気と語り／「柳湯の事件」** 第3回

日高 佳紀 (ひだか よしき)

「柳湯の事件」(1918)において弁護士に自らの行為を説明する青年は、果たして犯罪を犯しているのか。青年の語りにひそむ「狂気」についてモダン文化との関わりから考えます。

**1月16日(木)** **劇化のリアリティ／「呪はれた戯曲」** 第4回

日高 佳紀 (ひだか よしき)

「呪はれた戯曲」(1919)には主人公の実生活をもとに書かれた戯曲が挿入され、さらにその戯曲の中にも別の戯曲が挿入されています。劇化の重なりから表されるリアリティの特質を検討します。

**2月13日(木)** **偶然性の物語／「途上」** 第5回

日高 佳紀 (ひだか よしき)

「途上」(1920)は、妻を亡くしたばかりの男が帰宅途上に探偵から呼び止められて交わす会話によって成り立つ作品です。探偵が明かそうとする男の犯罪から物語の特質を考えます。

**3月6日(木)** **レトリックとしての犯罪／「私」** 第6回

日高 佳紀 (ひだか よしき)

「私」(1921)は、犯罪の容疑がかけられた「私」の一人称語りで構成された作品です。物語のレトリックが犯罪小説のトリックそのものにつながる様相を読み取っていきます。

### 受講にあたっての留意事項

本講座はいわゆる「ネタバレ」を含みます。  
扱う作品は新潮文庫、集英社文庫、中公文庫等で読めますので、ぜひ一読後にご参加ください。